

委員会視察記録

委員会名	総務委員会			
期 間	令和8年7月21日～22日			
参加者	委員長	望月香世子	副委員長	山田 新
	副委員長	伊藤 謙一	委員	江間 治人
	委員	相坂 摂治	委員	田口 章
	委員	中谷多加二	委員	遠藤 行洋
	委員	早川 育子		
視察先	1 富士の人事部 F-DRIVE（富士市永田町） 2 ぬましんCOMPASS（沼津市高島町） 3 加和太建設株式会社（三島市文教町） 4 リコー環境事業開発センター（御殿場市駒門） 5 富士モータースポーツフォレストテラス（駿東郡小山町大御神）			

視察の概要

7月21日（火）

■ 富士の人事部 F-DRIVE

<概要>

「富士の人事部」は国（経済産業省）が推奨する「地域の人事部」構想を活用し、若者の地域定着と企業の組織改革を目指す官民連携のプラットフォームである。自治体、金融、教育機関などが連携し、企業単独では難しい人材の「確保、育成、定着」を地域全体で支援しており



「企業間の人事部」として地域企業の競争力強化と活性化に取り組んでいる。一般的な「採用→育成→定着」ではなく、「育成→定着→採用」のアプローチを重視している。働く人が「働きがい」を感じることが自社への愛着につながり、さらに魅力的な企業として認知されることで若者の採用に結び付けていく。具体的には越境型人材育成プログラム（越境ラボ）、組織OS（組織風土・信頼関係・働きがい）のアップデート、教育機関との高精度マッチングの3つのアプローチで伴走支援を行っている。人口減少が進む中でも、成長を続けられる地域となるためには働く世代の個々人の強みを最大限に生かす仕組みづくりが必要である。「富士の人事部」では将来にわたり、サステナブルな地域となるためのより強固で柔軟なプラットフォームを目指している。

<主な質疑応答>

- Q 国の補助金の採択状況とプロジェクトの維持、継続に関するマネタイズ（自立採算）の考え方について教えてほしい。
- A 国への補助金申請は採択されなかった。創業間もない企業であり実績や評価加点の獲得が難しかったためだと考えている。ただ国でも「定着からのアプローチ」には興味を持っている。本当に変わりたいと思っている企

業を徹底的に支援したい。公金をもらおうと平等性のルールがあり、やりたいことができなくなる恐れもあるので現在公金は受け取らず自立採算で運営している。対価を得ながら価値を提供する運営はできている。

Q 行政側では、民間主導の「富士の人事部」の動きをどのように支援、位置づけているのか。

A 富士市としても若者の市外流出や出生率の低下、将来的な人材不足は大きな課題である。「富士の人事部」は地域課題の解決に向けた重要な取り組みであり、現在は行政的な助言や取り組み内容の周知等を中心に連携しているが、今後の事業展開を見ながらより良い関わり方を検討していきたい。

■ んましんCOMPASS

<概要>

経営の効率化に伴い閉店した沼津駅前支店を、沼津商店街のシンボリックな場所として地域を元気にするために有効活用できないかと考え「若い人が集まる場所」をコンセプトに6年前にオープンした。第1フェーズとして沼津市と連携しIT企業の誘致を実現、第2フェーズでは大学や高専が地域と連携して地方



創生に取り組む文部科学省の地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(「COC+」)に着目し、沼津高専のサテライトオフィスを設置した。これにより創業を目指す起業家の活動拠点を提供するとともに、地域課題の解決に向けて伴走支援を行うまちづくりプラットフォームのベースができ上がった。またスタートアップ支援を目的にシェアオフィスやコワーキングスペースを開設し現在21社が入居している。さらに人と情報が集まるコミュニティとして誰でも無料で本が借りられる「一箱本棚オーナー制度」の導入や、地域飲食店を支援するお弁当事前注文・販売サービス「まちなか社食」なども展開している。自治体や各種機関が協力することで地域課題を解決し成長していく「んましん地域活性化モデル」の実現に向けてハブとなる施設を目指している。

<主な質疑応答>

Q 沼津高専がサテライトオフィスを置いているが、連携することになった経緯を教えてください。

A 沼津高専とは「COC+」事業による連携だけではなく、事業者の技術課題解決のため、お客様を伴って相談に伺うことも多く以前からお付き合いがあった。また沼津高専を卒業した高いスキルを持つ方がセカンドキャリアなどで沼津市に戻る際、自分のスキルを生かせるところを紹介してほしいという要望があり、信用金庫として豊富な企業情報に強みがあるため、マッチングを支援している経緯もある。

Q 大学とのコラボレーションの事例は。

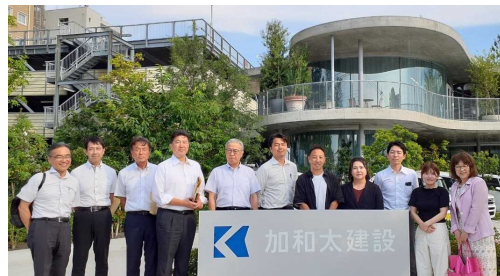
A 静岡県立大学や静岡大学と取り組んでいる事例がある。静岡県立大学とは沼津のお茶の活性化について、静岡県内のお茶は地域によって価格差が大きく沼津のお茶は比較的安価に取引されているため沼津茶のブランド力を向上させる取り組みを行っている。また静岡大学とは製造業における高

高齢者の活躍をテーマに、それが在宅でできないかという観点から地域企業と在宅の高齢者をオンラインで結ぶことで解決が図れないか検証を進めている。

■ 加和太建設株式会社

<概要>

三島市に拠点を置く建設会社であり従業員は約 330 名、売り上げは約 160 億円で直近 15 年間で約 5 倍に成長している。不動産取得から企画、設計、施工、運営、維持管理までを一貫して行うのが強みであり、会社変革のプロセスをシステム化し、そのノウハウ等を他社に販売することも行っている。まちづくりの取り組みとして三島大社、三島広小路、三島駅を結ぶ三角形のエリアを「歩いて楽しいエリア」にする挑戦を 15 年前から続けている。具体的には建物をリノベーションして魅力的なテナントを誘致する、廃園した幼稚園をまちづくり拠点として再生する、スタートアップ拠点など人が集まるコミュニティーを創出するなどに取り組んでいるほか、起業・開業支援プログラムの実施や NPO 活動とも連携し多様なプレーヤーがまちづくりに関わる仕組みを構築している。1 応援する人を増やす、2 小さな店舗・活動を増やす、3 人と活動をつなぐ、4 外から資金、起業、人材を呼び込む、5 高さ（社会的インパクト）を出す、6 地域の可能性を広げる、この 6 つの理念を意識しながらまちづくりを進めている。



<主な質疑応答>

- Q まちづくりにおいて社長 1 人の力では限界があると思うが、多様なプレーヤーとどのようにつながり、連携関係を構築してきたのか。
- A 自分が地元に戻ってきた当初は J C や商工会議所青年部など地元経済団体の 2、3 代目の経営者が、まちづくりの中心で自分たちの商売のためにまちを良くしようという目的でやっていた。その後 SNS の普及や活動の多様化に伴って経営者層だけではなく、川をきれいにする活動、映画づくりからまちづくりにアプローチする活動、子育て世代の支援団体などの NPO や移住者コミュニティーなど多様なプレーヤーが現れた。そういう人達と「こんなことやったらおもしろいよね」と 1 個 1 個つながりながらやってきた。
- Q 自己資金がないけれど、まちづくりに意欲があるプレーヤーを取り込んでいく、支えていくにはどのようにしたらよいと思うか。
- A 大変難しい問題である。自分たちは 80 年続く会社の資産を使いながら、まちづくりに関わるプレーヤーに資金や人を投じて手厚く支援してきた。こうしたバックアップがないとプレーヤーの固定化を招き資金力がない人も含め多様なプレーヤーの参入は難しいと感じている。新しいプレーヤーを育てていく財政的な支援制度が必要かもしれない。

7 月 22 日（水）

■ リコー環境事業開発センター

<概要>

当施設は1985年に複写機製造の主力工場として設立されたが、2016年に「環境経営」推進の拠点として再開設され、本年4月のリニューアルを経て今日に至っている。当センターは複写機の再生ビジネスで利益を上げる「稼ぐ」、新規環境事業を創出する「創る」、環境経営の実例を提示して共創を生む「見せる」の3つの機能を有している。「稼ぐ」では、経済合理性と環境保全効果を高めるため製品リユース、部品リユース、リサイクルの順で循環させる「コメットサークル」の取り組みを徹底し年間2.7万台を回収、1.2万台を再生している。「創る」では、バーチャルパワープラント技術や企業から排出される廃プラスチックを循環させるサービスに取り組んでいる。「見せる」では、自治体向けに脱炭素計画の策定や地域との合意形成の支援などを行っており、民間企業向けにはCO₂排出量の見える化や脱炭素ソリューションの提供など中長期的な伴走支援を行っている。新規環境事業の立ち上げ時に利益創出との両立に苦慮し多くの失敗を経験してきたことから、そうした失敗談も顧客に共有し真の環境経営のヒントにしてもらっている。



<主な質疑応答>

Q リユース（リマニュファクチャリング）は中古品と何が最も違うのか、保証などはどうなっているのか。

A 通常の中古品はそのまま簡易清掃のみで再流通するが、リマニュファクチャリングは回収した製品を一度部品レベルまで完全に分解、洗浄し、部品や消耗品を新品に交換した上で再組み立てを行うため外観、機能ともに新品と同等の品質を保証している。新製品と同様に5年間のメーカー保証を付けて販売やリースしており新品同様の品質保証を担保できることが自社再生ビジネスの最大の特徴でありお客様に選ばれるリーズナブルかつ高品質なサービスにつながっている。

Q 市場に出た製品（コピー機等）の回収や管理はどのように行っているのか。

A 出荷された製品はネットワークを介して、いつ、どのように使われたかの使用履歴や稼働データをリアルタイムで把握できる仕組みを取っている。これにより部品が摩耗、劣化してきたタイミングを正確に予測し、適切なタイミングで回収やメンテナンスの手配を行うことができる。一元管理されたシステムと全国のサービス拠点、回収網がしっかりと連携することで無駄のない効率的な資源循環を実現している。

■ 富士モータースポーツフォレストテラス

<概要>

富士モータースポーツフォレストプロジェクトは、富士スピードウェイを中心にトヨタグループが推進する複合的な体験型モビリティリゾート開発



事業である。「モビリティ体験の聖地」をビジョンに掲げ世界中から人が集う地域づくりを目指し 2017 年から段階的に整備を進めている。エリア内には年間 70 万人が訪れるサーキットを核に、高級ホテル、見学できるレーシングガレージ、キャンプ場などが既に開業している。今年 6 月に一部先行オープンした富士モータースポーツフォレストテラスは、エリア内のさらなる高付加価値化と来訪者への多様なサービス提供を目的に整備を進めている複合商業施設である。本施設はモータースポーツファンや観光客が気軽に立ち寄り滞在を楽しめるにぎわい拠点として計画されたもので、エリア全体の利便性と回遊性を高めるため誰もが利用しやすいカジュアルな飲食サービス等の提供を目指している。また来年 3 月には展望温泉施設とホテルが開業予定である。さらに 2028 年春を目標に新東名高速道路のパーキングエリアと直結する日本初の民間接続型 P A 施設の整備が計画されており、今後も周辺地域への持続的な経済波及効果や観光振興が期待される。

<主な質疑応答>

Q 来訪者のアクセスの現状は。

A 現在既に開業している富士スピードウェイホテルで言うと、宿泊客の約 6 割がインバウンドで、その 50%~60%が東京でレンタカーを借りて高速を利用して来訪する。残りのインバウンド客は三島駅まで新幹線で、そこからバスなどで来る。日本人の宿泊客は東京方面から来る人が大半で基本的にはマイカー利用である。そのほか新宿から 1 日 2 本バスが出ている。三島駅からのバスは無いが御殿場駅からホテル行きのバスが出ている。

Q このエリアで本プロジェクトを開始することになったきっかけは。

A 本プロジェクトの構想は 2017 年にスタートした。当時「クルマへの愛」をコンセプトとした特別なホテル空間をサーキットの近くに建設したいとの思いがあり候補地を探していた。その際に小山町が静岡県のみじのくにフロンティア推進区域の指定を受け富士スピードウェイ周辺の開発を計画しているということで、小山町にアプローチし相談を重ねた中で、小山町に誘っていただく形で開発が始まった。